

別記様式第6

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（文学）	氏名	王 艶玲
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 和辻哲郎の日本人論とその周辺－風土考以前から日本精神考へ－			
論文審査担当者			
主査	教授	松井	富美男
審査委員	教授	越智	貢
審査委員	教授	勝部	真人
審査委員	准教授	衛藤	吉則
審査委員	教育学研究科教授	畠中	和生
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、序論、本論2部、結論、付録からなり、日本文化論者としての和辻哲郎に焦点を当て、先人及び同時代人と比較してその日本人論の特徴を明らかにすると共に、風土考以前から日本精神考に至る社会的急変が和辻にいかに関与したかを考察する。</p> <p>序論は、和辻倫理学の骨子を概説した後、本論文の目的と方法を示す。</p> <p>本論第一部は、第1章から第4章までの四章からなり、和辻以前の日本人論を扱う。第1章は、第二次大戦までの日本人論ブームの背景を探ると共に、天心、新渡戸、内村の先駆的役割について論じる。第2章は、三宅雪嶺の『真善美日本人』と『偽悪醜日本人』を取り上げる。雪嶺が挙げる日本人の性格の功罪を概説し、彼が紳商と対峙させて「土風」を鼓舞した点に和辻との類似性を見いだす。第3章は、志賀重昂の『日本風景論』を取り上げる。志賀は「瀟洒」「美」「跌宕」を日本風景の特徴とし、これとの関連で日本人の特性を示すが、それが恣意的で主観的なことを指摘する。第4章は、芳賀矢一の『国民性十論』を取り上げる。芳賀が挙げる「楽天洒落」「淡泊瀟洒」「絨麗繊巧」「清浄潔白」などの日本人の特性を明らかにして、これと和辻の日本人論との類似性を指摘する。</p> <p>本論第二部は、第5章から第12章までの八章からなり、和辻の日本人論を中心に扱う。第5章は『偶像再興』を取り上げ、この時期の和辻が偏狭な国粹主義から一線を画し、古印度、中国、西欧を日本文化の源流とする折衷主義であったと指摘する。第6章は、『日本古代文化』を取り上げる。和辻は、優れた想像力と子供らしさを持ち、「つみ」を畏れるが善悪観念を有しない上代人の心性の内に、日本人の典型を見出していると指摘する。第7章は『風土』の日本人論を取り上げる。和辻は、モンスーン風土から「しめやかな激情」と「戦闘的恬淡」という日本人の特性を引き出すが、この一部は芳賀や久松の日本人論と符合すると指摘する。第8章は、『続日本精神史研究』の日本精神考を取り上げる。和辻は、日本精神は重層的な日本文化を通じて歴史的風土的に把捉されるとする。この見方から当時の社会風潮に対する和辻の抵抗感を読み取る。第9章は、同上書の「現代日本と町人根性」を取り上げる。和辻は、「町人根性」が明治期に実学に衣替えしてブルジョア精神と結びつき、全体社会への犠牲的態度を喪失したとするが、この時点から和辻の立場が変化したと指摘する。第10章は『日本の臣道』を取り上げる。和辻は、「尊皇の道」を鍛え直すために「清明心」による「滅私奉公」の必要性を説くが、この時期に日本精神論者への「転向」が明確に認められると指摘する。第11章は津田左右吉を取り上げ、記紀及び日本精神の「発露」に関する和辻との相違点を明らかにする。第12章は、『菊と刀』の和辻批評を取り上げる。和辻は同書の学問的価値を認めないが、彼の批判も個人的経験に基づき非学術的だと指摘する。</p>			

結論は、本論を踏まえて、倫理学者としての和辻の根底に一貫して日本文化論の視点が潜んでいること、和辻の日本人論は先人のそれと多くの共通点を含むが、「しめやさか」の特性は和辻自身によってもたらされた可能性が高いこと、日本精神考の頃には「転向」よりも抵抗の痕が伺えること、「間柄」の倫理と日本精神は社会的契機だけでなく個人的契機も必要とする点で共通すること、などを指摘する。

付録は、本論の関連資料を挙げる。

このように本論文は、和辻の日本人論の独創性に関して様々な観点から洗い直し新たな視座を与えた点で高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。